

「会社を綴る人」 朱野帰子/著



何をやってもうまくできない紙屋が家族のコネを使って就職したのは老舗の製粉会社。唯一の特技・文を書くこと(ただし中学生の時にコンクールで佳作をとった程度)と面接用に読んだ社史に感動し、社長に伝えた熱意によって入社が決まったと思っていたが—配属された総務部では、仕事のできなさに何もしないでくれと言われる始末。プログラマーの同僚・榮倉さんにネットで悪口を書かれながらも、紙屋は自分にできることを探し始める。一方、会社で扱う文書にまつわる事件を仕事もコミュニケーションも苦手なアラサー男子が解決!?

人の心を動かすのは、熱意、能力、それとも…?
今を生きる社会人に贈るお仕事小説。

(双葉社HPより)

不器用な主人公は少しずつ周囲の人たちに認められ、自身の仕事に対する姿勢が徐々に変化していく。なぜなら彼には唯一得意なこと、「文を書くこと」があったから…

しかし、主人公が認められたのは文章力が優れていたからだけではない。「文を書くこと」が自分の「武器」になるということに気づき、ひたむきにそして偽りなく文字に起こす思いがあったからである。

もちろん働く上でスキルは必要だけれども、それ以上に「自分は〇〇したい!」「会社を〇〇したい!」という強い気持ちがあれば、人を動かし、会社を動かし、自分の自信につながっていくのかも…と思える一冊。

保木間支店 Mさん 推薦

